

## 「神社のいる近代史」の試み

山口輝臣

ただいまご紹介にあずかりました山口でございます。本日は私のようなものを歴史あるこの会へとお招きいただき、ありがとうございます。ご出席者のお顔を拝見してありますと、私にとって先生にあたる方々までいらっしやいまして、その前で話をするということで、緊張しております。

はじめに今回の話をいただいたとき、このようなご説明がありました。宗教学・民俗学・建築史学などさまざまな分野の方がたによる「近現代の神道・日本文化」の特集号を企画している、については「歴史学からみた近現代の神道・日本文化」をお願いしたい、と。それに対して私は、お引き受けしますが、題は変更させてほしいと申しました。なにせこのままの題名では、まるで私が歴史学を代表しているかのように（笑）、ほかの先生方とは違い、私の場合は

いかにも荷が重すぎると、謙虚に反省した次第です。そこで別の題目が必要となりまして、捻りだしたのが、ここにあります『「神社のいる近代史」の試み」となります。そう言われてみると、なんとなく気楽そうな題に聞こえてきませんか？

その経緯はとにかくとして、本日はこうした題名で、日本の近代史研究と神社とのかかわりの一端に触れようと考えています。もう少し詳しく言いますと、日本の近代史で神社がどのように扱われてきたのか、あるいは扱われてこなかったのか。そしてその背景にはどのような考え方が存在していたのか。そういったことについて、私自身がこれまでしてきた研究と対比させながら、お話ししてみようと思います。どうか最後までおつきあいください。

## 創建神社という不思議さ

神社と近代という時代との絡み合いを考える際、ひとつきつかけとなるのが創建神社という不思議な言葉です。これは近代になって創建された神社を指します。靖国神社、平安神宮、明治神宮などを思い起こしてください。植民地につくられた神社——台湾神社、朝鮮神宮など。このところすぐれた研究が相次いで出されています——を含めても良いでしょう。創建神社という言葉自体、十分に定義された学術用語ではありませんし、またこの言葉には近代の神社、さらには神社一般に対するある特定の見方が濃厚にまわりついています。ひとまずこの言葉を使って話を先に進めることにします。

こうしたいわゆる創建神社のなかで、これまで圧倒的に注目されてきたのが靖国神社であることは、私などがあらためていうまでもありません。戦後の日本におけるイデオロギー対決の重要な論点として、「靖国神社—政教分離—国家神道」とでもまとめられるような問題系——いわゆる「靖国問題」——を生んだことによるのでしょう。

ただ戦前期の神社に対する国家の態度を鳥瞰してみますと、靖国神社は神社のなかでも相当に例外的な存在と扱われていたことが分かります。この点も周知のことですが、

内務省がもっぱら取り扱っていたほかの神社とは違い、靖国神社に関しては、陸・海軍省の関与が制度的に認められていました。そのため神社一般に対する政策と、「靖国神社—招魂社系」とも呼びうるものへのそれとは必ずしも同じ方向を示しているとは限らず、ときにはそのことが批判されることもありました。「靖国問題」とは、かつて神社という枠組のなかではむしろ「例外」であったものを、対立する当事者相互が「典型」と見ることによってはじめて「問題」となったといつてよいでしょう。

「靖国問題」を語りたいという人はそれでもいいのでしょうか。ですが靖国だけが神社なわけではありませんし、それどころか創建神社の「典型」であるかどうかもあやしいわけです。すると、靖国神社を語りさえすれば、それで神社が理解できるとか、それで創建神社が分かるという話にはなりません。靖国神社以外にも目を向ける、言い換えますと、「靖国問題」からひとまず離れてみる必要が生じてきます。

そこで私は明治神宮に目を向けてみました。そのささやかな成果は、『明治神宮の出現』という小さな本にまとめられています。タイトルからも推察できますように、明治神宮が創建される過程を描いた作品です。しかし勘違いしていただきたいのですが、私はこれを創建神社の事例研

究として記したのではありません。いやそれどころか創建神社の個別研究などまったく必要ないと断言します。こんなことを申しますと誤解されそうなので、あらかじめ断っておきますが、これは例えば、湊川神社の研究などいらない、宮崎神宮を調べるなど時間の無駄だということではありません。まったくそれとは逆です。そうした研究は十分に意義がある。だからこそ、それを創建神社などという胡散臭い言い方の一事例研究に貶めたりしてはいけないということなのです。

### 創建神社ではない神社とは？

いささか興奮して感情的な表現を口走りましたが、そこまで悪くは言わなくとも、創建神社というのがどうも据わりの悪い言い回しであることは、どなたも感じられるところでしょう。だってそうではありませんか、近代に神社を創建したとして、そうした神社を創建神社と呼んでしまうと、それ以外の神社はまるで創建されなかったもののように聞こえませんか？

創建神社ではない神社が創建されなかったなどということはないでしょう。出雲大社であれ宇佐神宮であれ、やはりどこかの時点で創建されたことには違いありません。となると、創建神社以外の神社が創建されなかったというの

ではなく、あたかも創建されなかったかのような印象、あるいはあたかも自然にできあがったかのようない思ひ込み、そういったものに乗っかる形で、創建神社という言い方がようやく存在していることになるでしょう。するとこの据わりの悪さは、「自然」と「作為」とか、「なる」と「する」といった言葉でしばしば語られてきた大問題にまでつながる興味深いものであることが分かりますが、本日はそれは別の方向に話を展開してみます。

創建神社という複合語のもうひとつ不思議なところは、うまい対語が見当たらないということにあります。さきほども言いましたように、創建神社という語は、創建かどうかで神社を区分する考え方に基づいていますので、これによると、神社は、創建神社とそれ以外とに分けられます。しかし後者、すなわち創建神社以外の神社に適当な名称がないのです。○〇神社といううちょうど良い対語が思い浮かばないのです。論理学の基本にたちかえって非創建神社という言い方をしても、せっかく「かのような」で繕っておいたほころびを解いてしまうことになるので駄目です。

しかしそれでも創建神社以外の神社を指す言葉を少々無理して挙げればこんなところでしょうか。神社、普通の神社、さらにいうと本来の神社。そしてまさに創建神社の対語を神社とするほかないという事態のなかに、神社と近代

との絡み合いについて思考しようとするときに立ちふさがる「常識」を見てとることができません。

### 創建神社を奇異とする「常識」とは？

近代に創建された神社の対語が神社であるという不可思議な現象を支えているのは为什么呢？ それはおそらく、神社は古いものだ、古いものこそ神社である、そうした神社が近代などという新しい時代に創建されるの這也是不思議なことだ——こうした考え方のように思われれます。「神社という古いものが、近代という新しい時代に創建されることを奇異なものとする考え方」と、とりあえずまとめてみることにしましょう。

神社のなかに古くからのものがあることは確かですので、前段の「神社は古い」という印象はそうした神社から導かれたのであろうと推測できます。しかし「神社が新しい時代につくられるのは奇異である」という後段は、神社をずっと観察していればおのずと導かれてくるというものではありません。神社を近代につくるということを、自らがもっているなんらかの知識と比較してはじめて、それを奇異だと判断できるわけですから。

すると考えるべきなのは、その知識とはいかなるものかとなります。それは思い切って言ってしまうえば、かつて宗

教的な世界に生きていた人類は、時代が進み、現在に近づいてくるにしたがい、そうした宗教的な世界から抜け出していくという観念にはかなりませぬ。厳密で学問的な議論と区別するために、この通俗的な理解による世俗化論を、世俗化された世俗化論と呼んでおくことにしましょう。創建神社という言い方を可能としていたのは、世俗化された世俗化論という「常識」でした。

### 「常識」と「宗教のいない近代史」

もう十年以上まえのことになりますが、元日の明治神宮で初詣に来た人びとに対して、「明治神宮はいつ頃できたかご存じですか」という調査ないし試験をするという、実にご苦勞な作業をしたことがあります。回答のなかには「奈良時代」などというものもありました。これなども合理的に解釈しようとすれば、明治神宮のあの鬱蒼とした森が、「神社は古い」という印象や、ここ最近にこんな大きな神社がつくられることなどないだろうという「常識」と結びついて答えさせたもの、と解すことができるかもしれません。もつともこの場合、回答者が「奈良時代」がいかなるものか皆目分かっていないという可能性も否定し切れませんが（笑）。

また同じ問いを、東京からずっと隔たった九州は福岡の

大学生などに投げかけてみますと、普通は明治時代という答えが一番多いのですが、「明治神宮が明治時代にできたなんて、そんな簡単な問題があるわけない」と考えた、賢いかひねくれたかどちらかの学生が、正解を導き出したり、あるいはひねりすぎて鎌倉時代などともんでもない答えを編み出してきたりします。鎌倉時代と答えた子の方が、奈良時代とした方よりも地理感覚は優れていそうですね（笑）。もちろん、なかには、明治天皇と同妃昭憲皇太后を祀る明治神宮は、大正時代に創建されたということをし、知識として持っている学生もいることはいます。

また「由緒ある」などという言い方があります。そうした言葉に似つかわしいような神社や寺院が研究者の協力を得て刊行している神社史・寺院史の類をひもときますと、巻の終わりのあたりに、申し訳程度の分量であることが多いのですが、その神社・寺院の近代についても触れられていることがあります。そこでの論述は、そろいもそろって、近代の荒波にいかにか翻弄されたのか、そしてその衝撃にいかにか耐えたのかといった視点からのものです。近代は宗教にとつて受難の時代である——こうといった考えは、一般の人々だけでなく、専門家と呼びうるような方々のあいだでも、広く分け持たれているようです。

こうした例にみられる考えが、先に述べた世俗化された

世俗化論と通じるものであることは、あらためて言うまでもありません。そしてこうした「常識」を、近代において宗教は周知的な存在であると言い直してみれば、近代史において宗教を扱うという発想が出てきにくいのは当然のことでしょう。日本近代史において「宗教のいない近代史」が再生産されてきた背景には、こうした「常識」が多大な「貢献」をしてきました。

### 「常識」と創建神社をつなぐ国家神道説

しかし一方では創建神社という「常識」に反する（とみなされた）奇異なる現象があるわけです。一般の人ほとんどなく、学者たちはこうした不整合についてもそれなりに思考してきました。

戦前期において神社が国家管理されていたことに着目し、そうした仕組みを国家神道と呼ぶ学説があります。国家神道説を分かりやすくは定式化したのは、村上重良さんです。村上さんの議論は、宗教的色彩が薄くなっていくはずの近代——ここで「はず」のモデルとして想定されているのが「西洋近代」であることは言うまでもないでしょう——において、なぜ神社が、それも大規模な神社までもが建てられていったのかという問いに対応したものであったと見ることができます。現に村上さんは創建神社という言い方を

しばしば用いましたし、そのなかに天皇・皇族を祀る神社が多く含まれていることを、国家神道の重要な一面としていました。

そして日本においては、近代としては例外的に宗教国家が成立したと村上さんは考え、創建神社も国家によってつくられたと解しました。村上さん以降の国家神道研究者のなかに近代日本を宗教国家と規定する人はほとんどおりませんが、「近代に神社を創建する」といった出来事を、国家によってなされたものと捉え、それとの絡みで理解するという点ではほとんど一致しています。国家というアクターを介在させることで、あからさまに言えば、国家が何らかの意図——統合という言葉がよく使われます——をもって、民衆や国民の意向とは無関係につくっていったとすることで、「常識」との両立を可能にした議論と言えるでしょう。

ところがこの国家の主導性を強調する議論は、少なくとも明治神宮の場合、額面通りには支持できません。拙著でも書きましたので詳細は省きますが、「国民」を称する実業家を中心とする人びとが、国家を巻き込むような形で、明治神宮は実現したのです。その点をもっともよく表すのが外苑という空間の存在です。外苑なくして明治神宮はありません、国費でなく国民からの献金によって造営されたの

でした。もちろんこのこともって、明治神宮創建の過程における国家の役割は小さかったという結論にはなりません。ただそれがひたすら国家によって追求され、主導されたとは言いがたいことは容易に納得されるでしょう。

### 会社の神社は創建神社か？

またいささか話が飛びますが、会社の神社とか企業の神社とか呼ばれるものがあります。これも近代に神社をつくるといったことを考えるにあたって、避けて通れない事例です。

会社の神社と一口に言っても規模だけでもさまざまなのがあります。デパートの屋上などに鎮座しているお稲荷さんぐらいの小さなもの。サッポロビールの工場——起源は開拓使麦酒醸造所。そのうちのひとつは、現在、再開発の結果、サッポロ・ファクトリーという名前で観光名所にもなっていますので、行かれた方もいらっしやるかもしれません——のごとく、札幌神社（現在の北海道神宮）に祀られる開拓三神を分霊してもらって成立した中位のもの。さらに大きいものでは、一ヘクタールもの敷地を有し、現在では花見の名所としても知られる三菱グループの土佐稲荷神社——創業者・岩崎弥太郎が、出身地土佐の藩邸を購入し、そこに祀られていた稲荷を受け継いだもの。大阪市西

区にあります——が有名でしょうか。

これら会社の神社については、家族経営を主体としていた財閥などをモデルに、家の神の延長として捉えるなど、いくつかの見方があります。たゞいづれにしろ、会社といういわゆる近代的な、しかも国家とはセクターを異にする組織を単位とした神社が、少なからぬ数、存在することは厳然たる事実です。こういった神社が近代に創建されたことを、「国家」を介在させるだけでは理解できないことは、明らかでしょう。まして会社の神社が本格的に開花するのは会社を中心とする社会編成が定着した二十世紀後半、そのうです、一般的な理解からすると、国家神道が崩壊したあとということになるのですから。なお、創建神社という言葉を使う人たちが、そこに会社の神社が含まれることはまづありませんでした。創建神社という言葉は近代に創建された神社すべてを含むものでもないのです。

このように見てきますと、近代に神社を創建するということに対する「常識」からする不可思議さについて、それを国家というものを介在させることで説明しようという試み——その中心が国家神道説になります——には、かなりの無理がありそうです。それでは、今後の研究課題は、「常識」とそれとは不整合な事実とのあいだ架橋するものを国家以外に見出して、それを軸とした議論を新たに提示する

こととなるのでしょうか？

### 「常識」と神社非宗教論

実はこれまでひとつ置いてきた問題があります。さきほど、時代が下るにしたがって宗教的なものが占める比重が縮減していくという「常識」的な考えを、世俗化された世俗化論と呼びました。ところが戦前期の神社を対象とする場合、もう少し複雑な様相を呈してきます。そうです、戦前期において、神社は宗教ではないとされてきたからです。神社非宗教論といわれます。そして神社が宗教でないとなれば、神社と宗教的要素の減少という傾向とはどのような関係にあるのか、当然のことながら問題となってくるでしょう。

この点について、ほとんど考慮しないというのが、多くの研究者に見られる態度のようです。神社が宗教でないということは、現在の感覚からいって、おいそれとは賛成しにくいでしょうし、神社が宗教でないと主張する研究者も、今日ではほとんど見当たりません。こうしたこともあって、神社は宗教にあらずという命題は、本気で考察するに値しないものとされ、これは政府が神社を優遇するために編み出したイデオロギーに過ぎないなどと、糾弾されることも少なくありません。もう少し温和に表現すると、当時どう

思われていようと、神社は宗教学的には宗教であることは間違いない、そうである以上、当然に世俗化の対象になるものだ、というところでしょうか。

これが整合性を持ったひとつの立場であることは私自身否定しません。ただ、神社非宗教論をイデオロギーとして糾弾するようなものはもちろん、もう少し穏当に宗教学を持ち出してくるようなものに対して、どうしても、下手なたとえで恐縮ですが、畳の部屋に土足で入っていくような感じが拭えないのです。

### 神社非宗教論と宗教学

例えばこういうことです。神社が宗教でないという言い方は、少し調べてみると、十九世紀後半の日本においては特殊なものでもなんでもなく、広く見られるものです。そのように述べている人物のなかには、福沢諭吉や井上毅をはじめとした大知識人、神職や仏教者、果ては宣教師まで含まれます。この点だけでも、神社非宗教論は政府によるイデオロギーに過ぎないという断罪が成り立たないことは明らかとなります。

しかしむしろここで問題としたいのは、福沢をはじめとした数多くの同時代の人びとの発言があるにもかかわらず、それらには頓着することなく、神社を宗教として分析を加

えていく研究者の根拠はなにかという点にあります。宗教学的には宗教であるから——煎じ詰めればそうなるのでしょう。

宗教学的に宗教であるとして神社に論及していけば、確かにそうする当人は安心なことでしょう。なにせこれまで研ぎ澄まされてきた宗教学上の概念がそのまま分析に使えますから。しかしだからといって、福沢の言葉に耳を傾けず、井上毅の思索を蔑ろにしてよいとは私には到底思えないのです。私がそう言うのは、ひとつには、同時代の言葉など無視しても構わないとするその態度に、それこそ一昔前の歴史家がさかんに使用していた時代的な「限界」や「制約」といった物言いと同様な不遜さを感じてしまうからにはかなりません。

しかしそれだけではないのです。そうした不遜と見紛うばかりの大胆さによっては表象されてこなかったこと、すなわち十九世紀後半の日本において、神社は宗教ではないという見解が広く共有されていたことについて考える方が、その時代を理解する上ではもちろんのこと、現在の地点から振り返っても、よっぽど重要なことを示唆してくれるように思えてならないのです。それにより心の平静が得られることはないかもしれません。しかしそもそもそうしたものを求めるべきだとも思えないのです。

## 神社非宗教論から神社宗教論へ

十九世紀後半の日本において、神社は宗教ではないという見解が広く共有されていたという一見するとこれまた奇異に思える事態をどう捉えることができるのか？ これについて、不遜さから逃れようとしてかえって謙虚に過ぎるという印象を受けられるかもしれませんが、こう考えて見ます。当時において、そうした命題に十分な説得力——これが何であるかは厄介な点ではありますが——があったと。福沢や井上毅といった巨人たちもこれを是としているという点なども踏まえると、そう考えざるを得ないのが実情といえるでしょう。

すると、神社は宗教ではないというこのシンプルな命題において、これが説得力を持ちうるとしたら、それは神社ないし宗教についての觀念が、その程度はともかくも、現在のものとは異なっていると考えるのが、もつとも素直な解釈といえるでしょう。そして神社と宗教について、それぞれ見ていくと、その度合が圧倒的に大きいのが宗教の方であることが分かってきます。このあたりの事情は『明治国家と宗教』という本に記しましたが、簡単にまとめておくと次のようになります。

主に religion の訳語として使用されるようになった宗教

という言葉は、明治十年代に定着していきませんが、そこで宗教とは、キリスト教と仏教との対比・比較・競争を通じて造形されたものであり、この両者に共通の性質——教義があり、信者があってなど——がすなわち宗教に特有の性質であるとされていきます。こうしたものとして宗教が考えられていたため、神社は宗教にあらずという言い方が説得力を持った——ここまで単純化するのともどうかとは思いますが、とりあえずこのように考えることができるでしょう。また神社以外にも、例えば儒教・儒学のようなものが宗教と見なされない——これは類比的に言えば、儒教非宗教説ということになるでしょうか——といったことなども、同様に理解することができそうです。詰まるところ、宗教とそれ以外に分ける基準が現在とは大きく異なっていたということになるわけです。

なお、このように考えると、儒教については置いておくとして、神社に関していうと、そうした十九世紀後半の状況と、神社が宗教であるのは当然とする二十一世紀初頭の今日とのあいだに、なんらかの変化があったということになります。この変化をもたらしたものがほかでもない宗教学です。仏教とキリスト教を中心とする宗教像を批判し、個人の信仰を核に宗教を理解していった宗教学——これは十九世紀から二十世紀へと転換する前後に成立し、潮

風・姉崎正治や加藤玄智などによって代表されます——よ  
り以降、個人の内なる信仰の遍在という議論を介し、むし  
る宗教の領域は拡張されていき、神社も文句なく宗教とさ  
れるに至るのです。こうして神社は宗教学的に宗教となっ  
ていったのです。

ここで述べたような見方は、そう鼻屑目でなく、徐々に  
受け容れられつつあるように感じていきます。私などからす  
ると大先輩にあたるような研究者のなかにも、宗教概念の  
生成などからはじめて国家神道を説明する方が出てこれら  
たりしているほどですから。しかしそうした説明も、本論  
へと入っていくと、なぜかいつのまにか神社は宗教である  
ものとして議論が進んでいきます。あたかも自分だけは、  
歴史から超然としての確な宗教概念を設定することができ  
ると考えられていらつしやるかのように。

### 「常識」の再考と「宗教のいない近代史」

創建神社からは随分と遠いところまで来てしまいました  
ので、ここらで話をもう一度戻しましょう。

近代に神社を創建すること、世俗化された世俗化論と  
いう「常識」との不整合について、国家を介在させること  
で説明しようという試み——国家神道説——には、かなり  
の無理があるということはお話しました。そこから

さらに議論を推し進め、宗教という観念の生成にまで遡っ  
た結果、どうやら「常識」とそれとは不整合な事実とのあ  
いだを架橋する必要などないということになりそうです。  
それよりもむしろ、そうした事態を不整合と感じさせるよ  
うな「常識」、モダンな神社をどうもあやしいと感じるそ  
の「常識」を再考すべきなのです。

世俗化論については、すでにいろいろと批判的吟味がな  
されています。特に日本を対象とした研究においては、も  
ちろんそれを批判的に摂取して、日本へと適用しようとい  
う方もいらつしやいますが、むしろそうした概念を用いる  
ことへ躊躇を見せる研究者の方が多数です。さらにそうし  
た論者が返す刀で、世俗化とは特殊西洋的な現象であると  
発言することすらあります。

こうした議論から分かるのは、どうやら世俗化論を宗教  
という観念を軸に構成する場合、宗教という観念が、あま  
り適当な言葉ではないかもしれませんが、「自生」してい  
たところと、そうでないところとでは、様相が大きく異な  
るということです。そして後者の一例である日本のように、  
近代と呼ばれる時代になって宗教という観念で考えるよう  
になったところでは、近代こそが宗教の時代であるという  
像すら描けるのです。もっとも religion そのものについて  
同じような作業を行っていけば、これまたさらに違った展

開へと導いてくれるかもしれませんが、これはいまの私の手には余りません。

また厳密な世俗化論とは少し異なる次元の問題として、世俗化された世俗化論という「常識」の影響力へも注意を促してくれるでしょう。国家神道説がこうした「常識」と実際の現象とのあいだに整合性を持たせようという試みであったとすれば、「宗教のいない近代史」は、いわばそうした「常識」へそのままたれかかる形で、すなわち近代において宗教など周辺の存在にすぎないのだから強いて触れる必要などないという「常識」に依拠する恰好で存在してきたといえます。またこれに日本人の非宗教性あるいは無宗教性といった議論が合わさったりすることにより、「宗教のいない近代史」の基盤はさらに強固なものとなるのです。もともと、世俗化という時系列に従って変化していくとする考え方と、日本人の非宗教性あるいは無宗教性といった超時間的な議論とは、論理的には結び付きにくいはずですが、政治文化論などにおいて、これらが前提とされていることはよく見られます。

ただし、日本人の無宗教性といった説に対し、宗教学者が与することはまずありません。日本人が無宗教というのは、仏教やキリスト教といった成立宗教を中心とした狭い宗教観を前提としてのことであり、自然宗教や民俗宗教と

いったものまで含めて考えれば、日本人が無宗教であるとはいえない——このように考えているからです。ただここで付け加えておきたいのは、通俗的な「常識」に対するこうした宗教学者たちによる批判は、ちょうど神社非宗教論に対するそれと同じ模様を描いているということです。すなわち世間でなんと言おうと、宗教学的には宗教であるから……という構図です。宗教学者は、早く二十世紀初頭からこの「常識」に向かって、全く同じ構図による批判を展開していましたが、その効果はほとんどなかったようです。

### 「神社のいる近代史」の時代？

また話がずれました。もう一度戻ります。世俗化された世俗化論による「常識」そのものもはや安定しているとはいえない以上、「宗教のいない近代史」も安泰ではなく、のんびりしてはられません。日本近代史研究も大変な時代に突っ込んだものです。

ただし、急いで付け加えておきますが、だから「宗教のいる近代史」が大切なのだ、これからは「宗教のいる近代史」の時代だ、近代史よ、宗教を取り上げよ、とはなりません。世界各地の宗教紛争を理由に持ってきたり、あるいはオウム真理教の事件を引っ張ってきたりしたところで、それらがそのまま宗教の重要性を示し、それ故に「宗教のいる近

代史」が大事だということにはなりません。これはいまま  
でくたくたく述べてきたことからおおよそお分かりにな  
られたでしょう。

宗教なるものが重要だったのかどうか？

なぜ重要とされたりされなかつたりするのか？

宗教の領分とはどのようなものだったのか？

そもそもそんなものなど存在するのか？

そういったところから考えていくことこそ大切なのであ  
り、そうした意味において、「宗教のいる近代史」があつ  
てもよいというだけなのです。同様のことは、宗教と対に  
なつて造形されていった神社についても、そして「神社の  
いる近代史」についても言えるでしょう。「神社のいる近  
代史」の試みはこのようなものとしてあり、そしてまたあつ  
てよいのです。

すでに与えられた時間を超過してしまいました。「神社  
のいる近代史」が実に謙虚な試みであつて、そしてその試  
みがさまざまな思索の材料を提供してくれそうだという印  
象を皆様にお持ちいただくことができましたならば、私と  
してはうれしい限りです。ご静聴、心より感謝いたします。

(九州大学大学院人文科学研究院助教授)